

能格性 (Ergativity) に関する覚え書 (Ⅱ完)

高 嶋 稔

様々な言語現象の中で、名詞(的語類)がもつ屈折範疇を大まかに分類すると、ひとつは「数 (Number)」であり、他は「格」になると思われるが、論理学、認識論、形而上学といった関連諸科学の中に格範疇に相当することが無かっただけに、伝統的屈折範疇全体の中で、「格」は、とりわけ、文法的であったといえるであろう。より文法的である、ということは、それだけ、言語の構造を分析・記述するにあたって、重要な範疇として有効であることになる、と考えられる。最近の言語理論においても、この「格」を中心にすえて研究がすすめられ、C. J. Fillmore にはじまる、いわゆる、格文法や、J. M. Anderson (1971)、(1977) など、多くの研究成果がみられるのは、その定義があいまいで、用法が多様であっても、「格」が文法範疇の中でいかに有効なものであるか、ということを示すものであろう。

これまでで、いわゆる、伝統文法と構造言語学にみられる「格」について、いくつかの考え方を検討してきたが、いづれも、言語の表層にあらわれる形態的現象を中心にとらえていた、と思われる。⁽¹⁾「格」を言語の深層において考えると、どうなるであろうか。C. J. Fillmore らの格文法での深層における「格」について、極く、簡単にふれてみる。

人間のまわりで起こる出来事や状態などのあらゆる事実が言葉によって表現されると、その文を、主語や目的語などの概念にとらわれずに、名詞句がその述語に対してもっている関係を明示的に設立するほうが、より正確に統辞的・意味的にその文を分析・記述することが可能である、と Fillmore らは考え

原稿受領日 1980年4月30日

(1) 本誌、第59輯(1979年12月)89-109ページ。

る。このような関係を設立するにあたって、表層の形態的屈折よりは、動詞などが名詞句と結びついて、ひとつの文が構成される時に、その文の動詞などの述語は一定数の名詞句を要求する。たとえば、動詞「愛する」はふたつの名詞句、すなわち、愛する側と愛される側をあらわす、それぞれの名詞句が要求される。「太郎は花子を愛する」という文は、意味内容はそれなりに完決している。また、動詞「売る」や「買う」は「売手」、「買手」、「商品」をあらわす三つの名詞句が必要とされる。たとえば、

- (1) X_1 は X_3 に X_2 を売る。
 (2) X_3 は X_1 から X_2 を買う。

という文において、 X_2 は商品をあらわし、 X_1 は X_2 の最初の所有者、 X_3 は X_2 の最終的な所有者をあらわすので、(1)と(2)の文におけるそれぞれの名詞句 X_1 、 X_2 、 X_3 は類似の役割をもっている、と考えられる。ただ、表層における X_1 と X_3 の統辞上の位置関係は(1)と(2)の文では反対になっている。しかし、統辞機能が異なっても、根底にある意味上の役割機能は同じである、とみる事が可能であろう。また、

- (3) 太郎は花子に本を送った。
 (4) 太郎は花子に写真をやった。

という文では、(3)の文に関与している役割を考えると、「送り主」、「事物」、「受取人」であり、同様に(4)の文では「授与者」、「授与物」、「受取人」である。このようにして、多くの文に動詞と共起する名詞句の役割を抽象化すれば一定数の型にすることが可能である、と Fillmore は考える。したがって、個々の動詞に対して果たす名詞句の別々な役割をひとつひとつ認定する必要はな

(2) この点については「項」という概念と共に後述する。

くなる。それは一定の役割型が、すべての文において、繰返し起り得ることを意味しており、この抽象的な役割型を「格」としたわけである。したがって、Fillmore によると、格文法では「格」という概念は形態的な屈折変化とは関係なく言語の根底にある意味とつながりをもった深層格である。深層格は言語の深層構造において、動詞と共起関係にある名詞句の一定の役割をあらわす型である、と解釈できる。Fillmore は動作主格、経験者格、道具格、対象格、源泉格、目標格、場所格、時間格、経路格などを認めている。しかし、深層格はあらゆる自然言語に共通して存在するものと見做される「格」、としているわけで、上記の格だけで、果して、すべての言語を記述するのに必要かつ充分か⁽³⁾どうかは、前述したように、疑問が残る。

深層の「格」についての問題点を考察してみると、ある文に動詞がひとつ使用されている場合に、その文中に生じる動詞と「項」の共起関係には制限がある。この制限とは、動詞と共起する項の数と種類を前もって指定している、ということである。つまり、動詞の語義があらわす動作・作用・状態などによって、それらにかかわる様々な役割を担う成員としての項の種類と数が定まってくることになる。このように、ある動詞には、ある項と他の項が、その動詞の意味する動作・作用・状態をあらわすのに必要かつ不可決であり、ほかの項は不必要、あるいは共起不能であるならば、ある動詞と共起可能な項との間にはなんらかの体系的な規則性が存在する、と考えられる。そして、もし共起可能な項のすべてに格を認めるならば、その格と、動詞と項の間に存在すると考えられる規則性の間に深い関係がある、と思われる。ここでいう規則性と項がたつ格との関係を明確にすることが、深層の格を認定するにあって、これからの課題となるであろう。

I. 能 格

能格 (Ergative) について、英語の辞書などによる様々な定義をいくつか引

(3) 本誌、第59輯 (1979年12月) 108-109ページ。

用したが⁽⁴⁾、伝統的な記述言語学や類型学における一般的な能格のとらえ方をポリネシア語の中のトンガ語 (Tongan)⁽⁵⁾ を例に検討する。

- (5) na'e lea 'a etalavou
past speak abs young man
 (the young man spoke)
- (6) na'e alu 'a tevita ki fisi
past go abs David to Fiji
 (David went to Fiji)
- (7) na'e tamate'i 'a kolaiatè 'e tevita
past kill abs Goliath erg David
 (David killed Goliath)
- (8) na'e ma'u 'e siale 'a e me'a'fa
past receive erg Charlie abs def gift
 (Charlie received the gift)

(5)と(6)では、主語として用いられている 'etalavou' (若い人) と 'tevita' (David) はそれぞれ格を示す指標辞 'a' (絶対格) がつき、動詞 'lea' (話す) と 'alu' (行く) は共に自動詞である。(5)と(6)の文で用いられているこれらの動詞は、動作主である主語のみの作用が表現され、他に及ぶことはない。し

(4) 本誌、第59輯 (1979年12月) 90ページ。

(5) このトンガ語の用例は S. R. Anderson (1976) 3-4ページに依る。用例の各語 (辞) の下に対応する意味を英語で、又、時制、法、格などについてはイタリック体の略語で示した。() 内の英語は用例として示した文の概略の意味である。略語は一般に用いられている方法に従ったが、つぎのように使用した。

<i>abs(olutive)</i> 絶対格	<i>intrans(itive)</i> 自動詞(辞)	<i>polite</i> 敬称
<i>acc(usative)</i> 対格	<i>m(ale)</i> 男性	<i>pres(ent)</i> 現在
<i>act(ive)</i> 能動	<i>n(utral)</i> 中性	<i>sg=singular</i> 単数
<i>asp(ect)</i> 相	<i>nom(inative)</i> 主格	<i>tense</i> 時制
<i>aux(iliary)</i> 助動(辞)	<i>nonpast</i> 非過去	<i>trans(itive)</i> 他動詞(辞)
<i>dat(ive)</i> 与格	<i>obl(ique)</i> 斜格	<i>1st</i> 1人称
<i>def(inite)</i> 限定(辞)	<i>part(iciple)</i> 分詞	<i>2nd</i> 2人称
<i>erg(ative)</i> 能格	<i>past</i> 過去	<i>3rd</i> 3人称
<i>f(eminine)</i> 女性	<i>pl(ural)</i> 複数	

かし(7)と(8)の例では 'tevita' と 'siale' は(5)や(6)と同様に動作主として用いられているにもかかわらず、格を示す指標辞は 'a' ではなく 'e' である。この(7)と(8)で用いられている動詞 'tamite'i' や 'ma'u' があらかず概念は、その動作として主語の行為が目的語に及ぶ、いわゆる、他動詞としての機能をもつ。目的語として用いられている 'kolaiate' と 'me'a'fa' がとる格指標辞は(5)と(6)の文の主語がとった絶対格指標辞と同じ 'a' である。このように、自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ格であるのに対して、他動詞の主語はそれと異なる格(能格)をとる現象を一般的に能格的 (Ergative) といわれている。

以上の能格については、格標示が何らかのかたちでなされている、いわゆる能格言語と称されている言語の例であった。しかし、格についての考え方の中で、既に述べたように、格には表層格だけではなく深層格も文法範疇のひとつとして扱われており、能格もその中に含まれている。深層格における能格は概略、自動詞と共起する主語と、他動詞と共に使用される目的語が同じ役割を果たす文について、その動詞を中心としてみた場合の統辞的・意味的關係をさしている、と思われる。英語の例あげて検討してみる。

- (9) The stone moved.
- (10) John moved.
- (11) John moved the stone.

(9)と(10)の文で move は自動詞であるのに対して(11)では他動詞である。(9)と(11)の間にみられる統辞關係を、一般に、能格的と称している。(11)の文における主語 John は能格にたち、行為の動作主または原因をあらわしている、と考えるわけである。このような統語上の關係をもつ動詞を能格動詞と称し、英語では move の他に open, sink, stop, roll, rotate, ignite などがある。

しかし、能格と呼ばれている言語現象は、単にこれまで述べてきたことだけにとどまらず、極めて複雑な形態的・統辞的・意味的なことを含んでいる、と見做される。以下、限られた資料に基づくため、すべての能格構造を検討するわ

けにはいかないが、可能な限り様々な構文によって、能格の形態的・統辞的特徴を中心にして、いわゆる能格性について検討を試みる。

II. 能格の形態的、統辞的特性

能格現象をみると、まず、つぎのような疑問がおこる。即ち、能格は当該言語の統辞特性や意味特性とは何ら関係を有せず、単に表層上の形態的現象にすぎないのか、あるいは、統辞構造や意味構造と深くかかわりをもっている格組織なのか、ということである。これらの疑問に答を得るために、一般的な統辞構造の問題として英語の例によって考えてみる。

- (12) I want the birds to chirp.
 (13) I want the dog to hunt the fox.

英語の統辞構造は、いわゆる、主格—対格構造 (Nominative - Accusative Structure) である。⁽⁶⁾ 上記の例文で、X wants Y to Z という構成において、動詞Zが自動詞あるいは他動詞のいずれであっても、意味のうえでは、Yは常に動作主 (Agent) であって、決して、受動者 (Patient) になることはない。しかしながら、主格—対格構造とされている英語においても、むしろ、能格—絶対格構造に似た、いわば、境界的な構造がみられる。たとえば、複合名詞 (Compound Noun) でN-Ving⁽⁷⁾ の型には 'bird-chirping' や 'fox-hunting' などの例があるが、このような複合名詞の意味は、もとの動詞が自動詞か他動詞かによって異なってくる。即ち、'chirp' のような自動詞と共に用いられる名詞はその動作主と見做される。つまり、'bird-chirping' は 'birds chirp'

(6) 一般的に、ある文の動詞が自動詞あるいは他動詞のいずれが用いられていても、その動詞の主語は同じ主格を用いる言語構造を主格—対格構造という。これに対し動詞が他動詞の場合に、主語は自動詞の主語と異なる能格をとる構造を、能格—絶対格構造 (Ergative - Absolutive Structure) という。時には、略して、それぞれを主格構造、能格構造ということもある。

(7) Nは名詞、Vは動詞をあらわす。

との関連で意味内容が理解される。一方、他動詞として使用される場合の ‘hunt’ と共に用いられる名詞はその受動者と考えられる。つまり、‘fox-hunting’ は ‘(someone) hunts foxes’ との関連で意味が理解され、‘foxes hunt (something)’ ではない (B. Comrie 1978 p. 337)。能格—絶対格構造をもつといわれている言語において、能格と動詞の関係はどうなっているであろうか。以下、この点について検討してみる。

いわゆる、能格言語と呼ばれている言語において、その格標示と動詞との間に呼応 (Agreement) 関係にある、と見做される場合がある。北東コーカサス語 (North-East Caucasian Language) のアバール語 (Avar)⁽⁸⁾ がその例である。

- (14) $\overline{\text{vas}}$ $\overline{\text{v-eker-}}$ $\overline{\text{ula}}$
 boy *m-run-pres*
 (the boy runs)
- (15) $\overline{\text{jas}}$ $\overline{\text{j-eker-}}$ $\overline{\text{ula}}$
 girl *f-run-pres*
 (the girl runs)
- (16) $\overline{\text{vas-al}}$ $\overline{\text{r-eker-}}$ $\overline{\text{ula}}$
 boy-*pl* *pl-run-pres*
 (the boys run)
- (17) $\overline{\text{ins:u-c:a}}$ $\overline{\text{jaš}}$ $\overline{\text{j-ec:-}}$ $\overline{\text{ula}}$
 father-*erg* girl *f-praise-pres*
 (the father praises the daughter)
- (18) $\overline{\text{vas-as:}}$ $\overline{\text{šjša}}$ $\overline{\text{b-ek-}}$ $\overline{\text{ana}}$
 boy-*erg* bottle *n-break-past*
 (the boy broke the bottle)
- (19) $\overline{\text{vas-as:}}$ $\overline{\text{šušbi}}$ $\overline{\text{r-ek-}}$ $\overline{\text{ana}}$
 boy-*erg* bottles *pl-break-past*
 (the boy broke the bottles)

(14)の ‘vas’ (少年) は男性名詞であるところから、それに呼応して ‘eker’

(8) このアバール語の資料は S. R. Anderson (1976) 4 ページに依る。呼応関係にあると思われる語(辞)の間を線で結んである。

(走る)という動詞には、共起する主語が男性であることを示す指標辞‘v-’がついており、時制は現在であることを示す‘-ula’が後接している。これに対して(15)の文は、‘jas’ (少女)が女性名詞であるため、動詞には女性指標辞‘j-’が前接している。この呼応関係は名詞が複数形であると、(16)の文にみられるように、複数指標辞‘-al’が名詞に後接し、それに呼応して動詞には複数指標辞‘r-’が用いられる。つぎに(17)の例は、主語として能格がたつ場合で、動詞は、(14)~(16)にみられるように主語と呼応するのではなく、目的語である‘jas’と呼応して女性・単数指標辞‘j-’が前接される。(18)は、(17)と同様に主語が能格にたち、目的語は‘šiša’ (びん)という中性名詞であるので、それに呼応して、動詞‘ek’ (こわす)には中性・単数指標辞‘b-’が前接し、時制が過去であるところから過去時制辞‘-ana’が後接している。(19)は(18)と同様であるが異なるのは目的語が複数形(-i)である。そのために動詞は目的語の形に呼応して複数指標辞‘r-’が前接している。つまり、アバール語の動詞は、呼応関係にある名詞が複数の場合は性に関係なく「数」に呼応することになる。

以上の(14)~(19)の用例をみて判かることは、アバール語では、動詞は自動詞の主語と他動詞の目的語に呼応して変化し、能格にたつ語(辞)とは直接的な呼応関係はみられない。この点は、主格—対格構造であるとされている英語などとは異なるアバール語独特のものであろう。英語のような統辞関係にあるものを「主格—対格制」(Nominative Accusative Basis)と呼ぶならば、アバール語にみられる統辞関係を「能格—絶対格制」(Ergative Absolute Basis)ということにする。

この能格—絶対格制による呼応がみられる言語に、グアテマラのマヤ語(Mayan Language)のキチエ語(Quiché)⁽⁹⁾がある。以下はその例である。

(20) k- ox- kam-ik
asp 1st-pl-abs die-part
(we die)

(9) このキチエ語の用例は B. Comrie (1978) 339ページに依る。

- (21) k- at- kam-ik
asp 2nd-sg-abs die-part
 (you die)
- (22) k- at- ka- cuku-x
asp 2nd-sg-abs 1st-pl-erg seek-act
 (we seek you)
- (23) k- ox- a- cuku-x
asp 1st-pl-abs 2nd-sg-erg seek-act
 (you seek us)

このキチエ語は、一見して判かるように、いわゆる「複統合的 (Polysynthetic) 言語」と称されもので、語幹にいくつもの派生接辞がついて、ひとつの文(語)を構成する。しかも、人称をあらわす接辞に格を標示する接辞がつくというのではなく、そのたつ格によって人称を表わす接辞そのものが異なる。たとえば、(20)と(23)における一人称・複数・絶対格形は 'ox-' であるが(22)の一人称・複数・能格形は 'ka-' である。また、(21)と(22)の二人称・単数・絶対格形は 'at-' であるが(23)の二人称・単数・能格形は 'a-' となる。

つぎに、格標示は「能格—絶対格制」によるが、動詞の呼応は「主格—対格制」に基づくと見做される言語がある。それはオーストラリア中部の Yuendumu 語の Walbili 語⁽¹⁰⁾である。

- (24) natju ka -ŋa puŋa-mi
I-abs tense 1st-sg shout-nonpast
 (I am shouting; I shout)
- (25) natjulu-lu ka -ŋa -ŋku njuntu nja-nji
I-erg tense 1st-sg 2nd-sg-acc you-abs see-nonpast
 (I see you)
- (26) njuntulu-lu ka -npa -tju natju nja-nji
you-erg tense 2nd-sg 1st-sg-acc I-abs see-nonpast
 (you see me)

(10) この Walbili 語の用例は K. Hale (1973) 309, 328ページに依る。

前記の用例によると、独立代名詞 (Independent Pronoun) は「能格—絶対格制」による格標示がなされている。(24)と(25)の一人称・単数形 'natju' は絶対格で(25)の一人称・単数形 'natjulu-lu' は能格である。また、(25)の 'njuntu' は二人称・絶対格であるが、(26)の 'njuntulu-lu' は能格である。呼応関係については、時制をあらわす 'ka' と共に、「主格—対格制」によってなされている。即ち、一人称・単数を示す接辞 '-na' は(24)において、一人称・単数・絶対格 'natju' に呼応しており、(25)においても二人称・能格の 'natjulu-lu' に呼応している。一方、(25)における一人称・単数・対格は '-ŋku' であるのに対して、(26)の二人称・単数は '-npa' であるところから、(26)の '-tju' は 'natju' との呼応で用いられている、と考えられる。Walbili語は形態的に、部分的には能格—絶対格制であり、ある部分は主格—対格制であるという構造がみられる。

つぎに統辭的な面を中心に能格性をみていく。まず、北東コーカシア語の ⁽¹⁾Khinalug語の例を検討する。

- (27) ligild sacax -ø -q'iq omä
 man-abs silent-m
 (the man is silent)
- (28) xinimk'ir sacax-z -q'iqomä
 woman-abs silent-f
 (the woman is silent)
- (29) bij -i šī ti -ø -k' 'i
 father-erg son-abs awaken-m
 (the father awakened the son)
- (30) bij -i riši ti -z -ki' 'i
 father-erg daughter-abs awaken-f
 (the father awakened the daughter)

(27)の 'ligild' は男性名詞・絶対格であるため 'sacax' の接辞は 'ø' であるのに対し、(28)の 'xinimk'ir' は女性名詞・絶対格であるところから 'sacax'

(1) この Khinalug 語の用例は B. Comrie (1978) 334ページに依る。

には ‘-z’ という接辞を要する。さらに、(29) の動詞 ‘ti’ は男性名詞・絶対格にたつ ‘ši’ に呼応して、(27) と同様に接辞はゼロであるのに対し、(30) の場合は ‘riši’ が女性名詞・絶対格であるため、(28) と同様、動詞 ‘ti’ は接辞 ‘-z’ をとる。即ち、(27) と (28) では絶対格にたつ主語に動詞が呼応して、主語の性によって接辞が異なる。しかし、(29) と (30) においては、動詞が絶対格にたつ目的語に呼応している。また、つぎの Khinalug 語の例にみられるように、動詞は絶対格にたつ名詞に呼応するが、動詞が、いわゆる、非定形従属動詞 (Nonfinite Dependent Verb) 的な形をとっている。つまり、いわゆる、従属分詞と同様の形と機能をもつ。そして、この従属動詞の意味上の主語とは異なる形をとる。このように、Khinalug 語は、名詞の格と動詞の呼応をみると基本的には「能格—絶対格制」による、と見做すことができるかもしれない。しかしつぎの例はどうか。

- (31) asir gada točkwī jukwathmä
I-dat boy-abs to-get-up want
(I want the boy to get up)
- (32) as jukwathmä hini phšä q'izi
I-dat want she-erg bread to-bake
(I want her to bake bread)

(31) と (32) の動詞 ‘jukwathmä’ の主語 (‘asir’ と ‘as’ は一人称・単数をあらわす変異形で用法に制限はみられない) は共に与格にたつ。意味上の動作主として (31) の ‘gada’ は絶対格であるが、(32) の ‘hini’ は能格である。これは、当然のことながら、(31) の動詞 ‘točkwī’ は自動詞で (32) の ‘q'izi’ は他動詞であることによるもの、と思われる。しかしながら、能格言語の特質とされている「他動詞の主語は能格にたつ」という点からみると、‘jukwathmä’ という他動詞の主語は能格になるはずであるが、前述のように与格である。もし、Khinalug 語が動詞をそのあらわす意味によって区別し (例えば、動作動詞・状態動詞など)、動作や行為が他に及ぶような他動詞が主語、あるいは、意味

上の動作主と共に用いる時のみ、主語は能格にたつのかもしれない。この点はさらに資料にあたってみる必要がある。

さらに Khinalug 語の資料を検討する。

- (33) as jukwešämä endžik -ondä
 I-dat wanted to-descent not
 (I wanted not to descend)
- (34) as uxur khičheb-läk'iri jet':imä
 I-bat to-you book-abs to-give not-want
 (I do not want to give the book to you)
- (35) hinu lik'uvri muxwižmä
 she-dat to-sing can
 (she can sing)
- (36) hinu phšä q'izi muxwižmä
 she-dat bread-abs to-bake can
 (she can bake bread)

(33)と(34)には、それぞれ、動詞がふたつ用いられていて、その主語は共通である。あるいは、ふたつの動詞を本動詞と準動詞に分けるとすれば、準動詞の主語は省略されている、とみることも可能であろう。(35)の動詞は自動詞で(36)は他動詞である。しかし、主語は共に(33)と(34)と同様に与格である。Khinalug 語は能格言語と称されているが、(33)~(36)に共通して、主語は、動詞が自・他のいずれであつても与格にたち、他動詞の目的語は絶対格である。ということは、Khinalug 語は形態上は能格的ではあるが、統辞的には主格—対格構造をとることがあることになる、と考えられる。(これに類するフィンランド語の例は B. Comrie (1975) で検討されている)

これまで検討してきた限りにおいて、能格的な特質をもつ、といわれている言語には、それぞれ、形態的・統辞的に特徴があり、ひと口に能格性という概念で一般化することは不可能と思われる。どのような言語現象を指して能格性というのか、という点については、あいまいな点が多く残されている、と考えられる(この点については S. R. Anderson (1976), E. L. Keenan (1976) で

検討されている)。従って、主格—対格構造をもつ言語に対立するものとして能格—絶対格構造をみると、様々な点で誤解をまねくおそれがある、と思われる。

つぎに、分離的能格性 (Split Ergativity) といえるような現象について、その例をみる。格の標示が「時制 (Tense)」と「相 (Aspect)」とに関係している、と思われるもので、その標示が、主格—対格制による、と考えられる場合と、他は能格—絶対格制による、と見做されることがある。つぎに示するのはその例で、南コーカシア (カフカズ) 語 (South Caucasian) のグルジャ語 (Georgian) である。

- (37) *student-i midis*
student-nom goes
 (the student goes)
- (38) *student-i çeril-s çers*
student-nom letter-acc writes
 (the student writes the letter)
- (39) *student-i mivida*
student-abs went
 (the student went)
- (40) *student-ma çeril-i daçera*
student-erg letter-abs wrote
 (the student wrote the letter)

グルジャ語は能格言語といわれているが、(37)と(38)の文は、現在時制の場合で、主語として用いられている '*student-i*' は主格であるが(38)の目的語 '*çeril*' は対格、というように、それぞれを示す指標辞が後接している。(39)と(40)は過去時制で、(40)の主語には能格を示す接尾辞 '-m' がつき、目的語には '-i' が後接している。この '-i' は、(37)と(38)の主格を示す標示と同じであるが、主語が能格であることと、(38)の目的語とは形が異なることから絶対格と解釈できる。従って、(39)の主語も絶対格になる。つまり、グルジャ語の接尾辞 '-i' は現在時制の主格と過去時制の絶対格を示すことになる。このように、グルジャ語は

(12) このグルジャ語と、つぎの Chol 語の用例はB. Comrie(1978)351-353ページに依る。

現在時制では主格—対格構造をとり、過去時制で能格—絶対格構造になる、と思われる。

つぎに、メキシコのマヤ語 (Mayan Language) のひとつである Chol 語は、「時制」と「相」に関してはグルジャ語と類似しているが、つぎの例をみて判るかのように、その分布 (Distribution) が異なっている。

- (41) ca čamiy-on
past die 1st-sg-abs
(I died)
- (42) ca čamiy-et
past die 2nd-sg-abs
(you died)
- (43) ca h- k'eley-et
past 1st-sg-erg see 2nd-sg-abs
(I saw you)
- (44) mi k- čamel
pres 1st-sg-nom die
(I am dying)
- (45) mi a- čamel
pres 2nd-sg-nom die
(you are dying)
- (46) mi h- k'el-et
pres 1st-sg-nom see 2nd-sg-acc
(I see you)

Chol 語では前述のキチェ語などのように、代名詞は接辞であらわされる。(41)の一人称・単数形は '-on' で絶対格である。ところが、(44)と(46)では、同じ一人称・単数形が 'k-' で主格にたっており(この 'k-' は(43)と(46)にみられるように軟口蓋子音の前では 'h-'), (43)では能格である。また、二人称・単数形が主語として用いられると、(42)では '-et' で絶対格にたち、(45)では 'a-' で主格である。ところが、この接辞 '-et' は二人称・単数形の目的語としても使用され、(43)では絶対格にたち、(46)では対格である。従って、(41)~(43)の統辞構造は能格—絶対格制により、(44)~(46)のそれは主格—対格制による、と見做すこと

が可能であろう。

以上、みてきたように、一般に、ある言語が能格言語といわれていても、その形態的・統辞的な構造は、表層的には、言語によって様々な特徴があり、既に述べたように、能格性といってもどのような言語現象をさしているのか、極めてあいまいである。

Ⅲ. 能格性と動作主性 (Agentivity)

一般的にいって、動作主 (Agent) は動詞によってあらわされる行為を引き起こす語をさすが、ここでいう動作主性というのは、概略、動作主が動詞によってあらわされる行為をどのようにするか、その程度をさすと考える。このように見做すと、つぎの英語の例は、(47)から(49)にいくにしたがって主語の動作主性は減じていく、ということになるであろう (Comrie (1978)p. 356)。

(47) John deliberately fell down.

(48) John, through his own negligence, fell down.

(49) John, through no fault of his own, fell down.

(47)の文は、動作主 John が自分の意志で、わざと行為をした、と考えられるところから、最も高い動作主性がある、と解釈することができる。(48)は「倒れる」という動作をさけることはできたが、それをしなかったわけで、動作主性は(47)と(49)に比較すると、中間となる。(49)は動作主の意志とは無関係に動作がなされたものと解釈できるので、動作主性は皆無に等しいとみることが可能であろう。このようなとらえ方としての動作主性と能格の間に、いかなる関係がみられるか、以下、いくつかの能格言語と称されている言語の資料を検討してみる。ただ、動作主性については、(47)~(49)でみたように、文のあらわす意味内容と深く関係するので、母国語のように直感 (Intuition) にたよって解釈することは不可能である。従って、文を構成している様々な要素の統辞的な役割から判断することになる。そこで、できるかぎり、文の理解が正確性をもつように、

以下の資料は可能なかぎり一対の文を比較することによって動作主性について
 みることにする。

まず、バスク語⁽¹³⁾の例からみていく。

- (50) herra -k z- erabiltza
 hatred *erg* you move
 (hatred inspires you)
- (51) ur-handia-k d- erabilka eihara
 river -*erg* it move mill-abs
 (the river works the mill)

(50)と(51)における主語は、いわゆる、無生物であるが能格にたっている。これらの文から前記の英文例(47)~(49)でみられたような動作に程度の差は認められない。したがって(50)と(51)の主語は能格にたっていても動作主性はないものと考えられる。

つぎに、前述(39)、(40)のグルジャ語の例を再度検討してみる。

- (52) študenti (*nom*) çerils çers
 (the student writes the letter)
- (53) študentma (*erg*) çerili daçera
 (the student wrote the letter)

(52)と(53)の文において、同一の名詞が(52)では主格にたち(53)では能格である。しかしながら、主語が主格、能格のいずれにたっても動作主性という点からの差異はみられない、と思われる。

つぎはバスク語の例である。

- (54) Martin-ek jan du
 Martin-*erg* ate *aux-3rd-sg*
 (Martin ate)

(13) このバスク語の用例は B.Comrie (1978) 357ページに依る。

54は、明確な目的語をもたない場合に他動詞が用いられ、主語は能格である。

‘du’ は他動詞と共に用いられる助動詞であるが、この形は動作主と受動者が共に三人称・単数形の場合に用いられるところから、より正確に意味をとると ‘I ate it.’ になると思われる。54のように能格が用いられても動作主性については何らその程度の差はみられないように推測できるであろう。このように使用される動詞は英語にもあり、例えば、‘John is eating a fish.’ に対して、‘John is eating’ のように用いられる。これに類する例は既述のトンガ語にもみられる。

- 55 na'e inu 'a e kava 'e Sione
past drink abs the kava erg John
 (John drank the kava)
- 56 na'e inu 'a Sione
past drink abs John
 (John drank)

55では、目的語がある場合で主語 ‘Sione’ は能格 (‘e’) 標示と共に用いられている。しかし、56では、目的語がないので主語は絶対格をあらわす ‘a’ と共に用いられる。トンガ語では、主語が能格であっても絶対格であっても、その動作主性に差異はないと考えてよいであろう。

つぎに、前述のキチェ語では、目的語なしに他動詞が用いられると、つまり、他動詞が自動詞的に使用されると、それに応じた標示が必要となる。

- 57 k- at- ka- kamisa-x
asp 2nd-sg-abs 1st-erg kill act
 (we kill you)
- 58 k- ox- kamisa-n-ik
asp 1st-abs kill part
 (we kill)

57で用いられている二人称・単数・絶対格をあらわす ‘at-’ は58にはない。そ

のかわりに58では、動詞 'kamisa' には再帰接尾辞 (Reflexive Suffix) である '-n' が後接している。

つぎに、同一の動詞が他動詞的に用いられたり、自動詞的に用いられたりする場合がある例として、前述の Walbili 語があげられる。

59) *natyululu ka -na wawiri !uwani*
I-erg tense 1st-sg-nom kangaroo-abs shoot
 (I am shooting the kangaroo)

60) *natyululu ka -na -la -tyinta wawiri -ki !uwani*
I-erg tense 1st-nom 3rd-sg-dat intrans kangaroo-dat shoot
 (I am shooting at the kangaroo)

59と60には共に '!uwani' (shoot) という動詞が使用されているが、59では他動詞的な用法で、直接目的語である 'wawiri' は絶対格である。これに対して60では、59と同じ動詞が自動詞的に用いられていることを示す '-tyinta' が使用されている。そして目的語 'wawiri' は与格を示す指標辞 '-ki' が後接しており、さらに目的語が三人称・単数・与格であることを示す接辞 '-la' が用いられている。59と60の文は主語が共に能格にたっているが、動詞の自・他、目的語の格 (絶対格, 与格) が異なっている例で、動作主性という点ではその程度に大きな差がみられるという判断は下せない。つぎに、北東コーカシア地方で使用されている西サーカシア語 (West Circassian Language) の Bzhedukh⁽¹⁴⁾ 方言の例をみると、

61) *č'aala-m č' eg°-ər yaz°a*
boy -erg field-abs he-plows-it
 (the boy is plowing the field)

62) *č'aala-r č'eg°-əm yaz°a*
boy -abs field-obl he-plows-it
 (the boy is plowing away at the field)

(14) この Bzhedukh 方言の用例は S. R. Anderson (1976) 21ページに依る。

61)で、主語が能格にたち、目的語は絶対格であるのに対して、62)の文では、絶対格が主語に用いられ、目的語は斜格である。同一の主語が目的語のたつ格によって異なる格をとる、ということは能格にたつ主語の動作主性は絶対格にたつ主語と大きな違いはみられない、と考えてよいであろう。

つぎの例も Bzhedukh 方言の例である。

- 63) p:śaśa-m chəy -ər yadə
 girl -erg cherkesska abs she- sews-it-trans
 (the girl is sewing the cherkesska)
- 64) p:śaśa-r chəy -əm yadə
 girl -abs cherkesska obl she- sews-it-intrans
 (the girl is sewing away at the cherkesska)

63)の主語は能格にたち、直接目的語は絶対格である。しかも動詞は接尾辞 '-ə' によって他動詞であることが判る。これに対して64)では、主語が絶対格で動詞には自動詞であることを示す接尾辞 '-a' がついていて、目的語には斜格を示す '-am' がついて、非直接 (Nondirect) 目的語であることが判る。このことは、動作が成就していないことをあらわしている、と解釈しえるであろう。

つぎに、既出のキチェ語を再度検討してみる。

- 65) k- in- loq'o-x la
 asp 1st-sg love -part 2nd-sg-polite
 (I love you) or (you love me)
- 66) k- in- lop'o-n čeh la
 asp 1st-sg love to-you
 (I love you)

65)の一人称・単数をあらわす接辞 'in-' と二人称・単数・敬称の 'la' は、その用法に明確なちがいはみられないようである。従って、65)の文は意味があいまいであると考えられる。ところが、66)の文は、'-n' という再帰接尾辞によって65)にみられるようにあいまい性は除かれている。

以上、能格言語といわれているいくつかの言語資料によって能格と動作主性

の関連について検討してきたが、限られた資料に基づくために、一般的な結論はだせないものの、少なくとも、能格にたつ主語の動作主性という点では、主格や絶対格にたつ主語と大きな差異はみられない、と考えられる。つまり、能格にたつ主語は、他の格にたつ主語より動作主性が高いことにはならない、と見做してよいであろう。

ひと口に能格といっても、これまでに検討してきたように、その中には、実に様々な言語現象が含まれていることが判かる。まだ未解決のことが多く、例えば、いわゆる受動態と能格の関係、能格の通時的機能や共時的機能、能格性と意味など、能格と関連する形態的・統辞的・意味的諸問題が多く残されている。⁽¹⁹⁾ いずれの問題も、文法範疇の中で重要な概念と考えられる「格」を少しでも明示的にすることから始めて、能格と見做される言語現象をより多くの資料に当って、周到に検討していくことが必要であろう。

References

- J. M. Anderson (1971) *The Grammar of Case*. (London: Cambridge Univ. Press)
 (1977) *On Case Grammar*. (London: Humanity Press)
- S. R. Anderson (1976) 'On the Notion of Subject in Ergative Languages' in C. N. Li (1976) pp. 1-23.
- S. R. Anderson & P. Kiparsky (1973) *A Festschrift for Morris Halle*. (New York: Holt Rinehart and Winston)
- B. Comrie (1975) 'The Antiergative: Finland's Answer to Basque' in *CLS* 11 (1975) pp. 112-121.
 (1978) 'Ergativity' in W. P. Lehmann (1978) pp. 329-394.
- R. M. W. Dixon (1979) 'Ergativity' *Language* Vol. 55, No. 1. pp. 59-138.
- R. E. Grossman, et al. (1975) *Papers from the Eleventh Regional Meeting Chicago Linguistic Society (CLS)* Vol. 11. (Chicago: Chicago Linguistic Society)
- K. Hale (1973) 'Person Marking in Walbiri' in S. R. Anderson & P. Kiparsky (1973) pp. 308-344.
- E. L. Keenan (1976) 'Towards Universal Definition of "Subject"' in C. N. Li (1976) pp. 33-333
- W. P. Lehmann (1978) *Syntactic Typology*. (Austin: Univ. of Texas Press)
- C. N. Li (1976) *Subject and Topic*. (New York: Academic Press)

(19) これらの諸問題のうち、いくつかは、B. Comrie (1978), R. M.W. Dixon (1979) で検討されている。